

魔法使いで黒猫だった
私

オズオズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

我輩は元黒猫であり、元魔法使いである。

目次

第1話

第2話

1

10

第1話

最初に言っておく、吾が輩は人間である。

名前は、黒猫^{くろねこ}。姿も黒猫。

職業は元魔法使い。現在さすらいの野良猫です。

1000年前に、魔女狩りに合いそうになったが、黒猫の姿に化けて逃げ出しました。その時から、ずっとこの姿で生きています。

一応言っておくと、人間の姿に戻れないわけではないです。

ただ、100年くらいは人間の姿に戻って、また命を狙われるのが怖かった。だが、だんだんとこの身体に馴れてきた。餌も少なくていいし、猫を食べようとするとする人は希なので命も狙われない。

そんなわけで千年間猫の身体で生活しています。

人間の慣れとは恐ろしい。見た目は猫だけ。

話が変わりまして、私は現在日本という国で生活しています。といってもまだ50年くらいしか経っていませんから、大したことありません。

この国は本当にいい国です。

野良猫がいても、人々は気にしません。むしろ優しい人は餌をくれたりすることもあります。食べるものにも困らない、身は安全。

もう永住してもいいくらい快適に過ごしています。

そんな私ですけど、実はけっこう抜けてるところがあるのです。

1000年前もそうでした。

ある日街に買い物に出掛けたときに、執拗にデートに誘ってくる軽薄そう男に絡まれました。

何時もならずげなく断って事を納めていたのですが、その時の男はめげずに何度も誘ってきたのです。

おそらく自分の誘いを断る女などいないという絶対的な自信の持ち主だったのでしよう。たしかに、顔は整っていたと思います。1000年前なのでおぼろげですが。

しかし、長年を生きる魔女にとって、顔など些細な違いでしかありません。結局最後まで断っていたのですが、男は苛立ったのか私の手首を掴んで強引に連れていかうとして来ました。

抵抗しても周りは助けくれませんでした。多分その男は貴族の子息か、なにかしらの関係者だったのでしょう。高そうな服を着ていましたから、分かりやすかったです。

正直、その時の私はお腹が空いていた上に、女の子の日であったこともあり、二重に気が立っていました。

そんな私は、ついに我慢の限界を突破してしまい、男を魔法で吹っ飛ばしてしまいました。

あの時の飛び方は凄かったですね。イメージは、ハリー・○ツターの吹っ飛びシーンでしょうか。男は店の果物箱に頭をつっこんで気絶していました。

それで魔女ってバレちゃって、魔女狩りに合いそうになつたんですね。まあ、今となつては、ちよつとヤンチャしてたくらいの感覚ですよ。大したことではありません。

では、どうして急にこんな話をしたか。

実は、またやらかしてしまつたからです。

その日の私は、何時もより寝不足でした。

なぜなら、その前日は春なのにとんでもない寒気で、寒いのが苦手な私は、何の対策もとれずに寒さに震えてまったく眠れなかつたからです。

四足歩行なのに酔っぱらいのように足取りがおぼつかない状態でした。

そんな私は少しでも暖かい内に眠ろうと、いつも昼寝をしている空き地に向かつている途中でした。

眠気のせいで視界がぼやけ、心は早く静かな所で眠りたいだった。

しかしこの時、私は自分が車道に出ていることなどまったく気がついていませんでした。

車にクラクションを鳴らされて、ようやく気がつきました。

だが、気がついたときにはもう遅い。魔法を使うことも出来ない距離まで、車は迫っていました。

私は、魔女ですが不死ではありません。あくまで不老。身体が老いだけなので、す。

なので、外傷的要因なら死にます。要するに、轢かれればまず助かりません。

長い人生だったなあ……と、覚悟を決めたときでした。

私は突如人に抱き抱えられました。

その直後、鈍い音が聞こえました。

最初は何が起こったのか分かりませんでした。

しかし、車は逃げるように去っていく音で、自分が死にかけていたことを思い出し、ました。

そうして冷静になって周りを見ると、後ろで頭から血を流した男の人が横たわっていました。

血の気がひく思いでした。

必死に嗚いて人を呼びました。しかし、元から人通りが少ない道です。誰も来てくれません。

それでも私は、呼び続けました。

『誰か、誰か！、誰かああ！ 来てください！ この人が死んでしまいます！』
猫語なのでにやーとしか言えていません。しかし、気が動転していた私は、それすら忘れてこんな言葉を延々と叫んでいました。

人と関わらずに生きてきたつけが、その時にすべて回ってきたんだと思います。

「……少し……静かにしてくれないか……頭に響くんのだ」

掠れた声が聞こえてきました。

その言葉に私は従って、鳴くのを止めます。すると男の人は力なく笑い。

「……はは。お前人の言葉が理解できるのか？ すごい賢いな。うちのアイドルより賢いんじゃないか？」

言葉を出す度に、男の人の顔から生気が消えていつているように見えます。まるでう死んでしまうかのように。

「……悪い。少し眠いんだ。寝かせてくれ……って、猫に言っても仕方ない……」

「ニャー！ ニャーニャー！ ニャー！」

何度呼び掛けても、男の人は気がつきません。

顔を前足で揺らしてみても、うんとも言いません。
死んでしまった。

そう理解したのは、数秒後でした。

私の不注意のせいで、人を殺してしまつて。

1000年以上生きた私が、初めて犯してしまつた過ち。それは過失というには、あまりに失つたものが大きすぎた。

絶望感に埋め尽くされる心の中。しかし、私は一筋だけ光があることを思い出した。

それは蘇生魔法。

魔女の中でもタブーされている禁術だ。

人を生き返らせることもそうだが、一番の理由はこの魔法を使った場合……。

……私は魔女ではなくなる。

魔法は使えなくなり不老でもない、ただの女の子になつてしまうのだ。

それでも私は、躊躇しなかつた。

「リザレクシヨン
蘇生魔法」

そう唱えると、私の身体はエメラルド色の光に覆いつくされました。



ここはどこだろう。

何か暖かい光に包まれているような感覚。右も左も分からないような不思議な空間。

俺は今日もいつも通り事務所に出勤中だったが……ああ、そうか。

たしか途中で車に轢かれそうになった黒猫を助けたんだった。

そして俺は車に轢かれた。

猫助けて死ぬってなんだか間抜けだな……。せめて可愛い女の子を命懸けで助けたみたいだったら、とてもかっこいい死に方だったんだが。

あくあ、目が覚めたら美人のお姉さんに、膝枕でもしてもらってねえかな。

まあ、あり得ねえよな。

「あ、気がつきましたか？」

あつたわ……。

何が起こったのか分からないと思う！ しかし、これだけ確実なのは、俺は現在金髪の綺麗な女の子に膝枕をしてもらっている！

なんだ、ただの天国か。

「なかなか気がつかないので、蘇生魔法が失敗したのかとひやひやしましたよ。ですが、どうやら成功したようですね。安心しました」

なにやら不思議な言葉が聞こえた気がする。蘇生魔法？ 何この人、未来の蘭子？
それとも新手の中二キヤラ？

というか、顔に気を取られて気がつかなかったけど……。

「何で裸なんだお前!？」

「は？ 何でって、さつきまで猫だったからですよ。蘇生魔法のせいで魔法使えなくなってしまうので、猫の姿が維持できなくなっただけですよ」

何でそんな堂々と、電波発言出来るの!? 俺がおかしいの？ 裸にこんな反応しちゃ
う童貞が悪いの!？」

「とと、とりあえず俺の上着着ろ！ 俺が捕まるから！」

「はあ？ ありがとうございます？」

不思議そうにしながら、女の子は上着を受け取った。

あぶねえ。ただでさえ警察に捕まりすぎて目をつけられてるのに、裸の女の子と一緒にいたりしたら、即案件ものだったぜ。

まあ、今の状況（裸に男物の上着1枚）もかなりエロいが……なかなかのお山をお持ち
ちで……。

やばい、これ絶対誤解されるわ。

出来るだけ人に見つからないように事務所に向かおう。

この人にも付いてきてもらおう。さすがにこの人を放っておくのは良心が痛む。俺が、女の子に提案しようとしたときだった。

遠くから聞こえてくる、よく街中で聞く音。

それは現場に向かうときのパトカーのサイレンの音だった。

疚しいことありまくりで冷や汗だらだらな俺に、女の子は死の宣告をしてきた。

「あ、そうだ。あなたさつき轢き逃げされたので、勝手に携帯電話をお借りして、警察に連絡しておきました。事情聴取の心作りをお願いします」

「俺が捕まる方じゃなければねえええええ！」

このあと滅茶苦茶怪しまれながら、事情聴取された。

第2話

日本の警察は優秀なのか、無能なのか分かりません。

轢き逃げした車は、後日現場に残っていた塗装の破片から割り出して無事逮捕したようです。まあ、私が飛び出したせいですが、逃げたのはよくないことなのでプラマイゼロとしましょう。

そこに関しては、素直に評価します。

しかし、私を助けてくれた男の人を執拗に疑って、署に連れていこうとしたのは看破できません。

勿論、私は何度もその人は何もしていないと主張しました。証拠も何もなかったのに、結局逮捕はされませんでした。最後まで警察は疑っていました。

気に入りません。もし魔法が使えるなら、警察署を破壊したくなるくらいイラつきました。

まあ、もう出来ませんが。

そう力を失った私は、ただのちよつと長生きした女の子でしかありません。

昔みたく、城を爆破させたり、箒に乗って空も飛べなくなりました。

それが顕著になったのは、警察が帰ったあとでした。

着る服もなく、寝床もなく、勿論お金もない。三ない状態の私は、これからどうすればいいのか途方にくれていました。

そんなとき、男の人がこんなことを言ってきました。

「あー。すまん。そんな格好で外にいるのはあれだし……人も集まってきてるようだから、一旦俺の仕事場に行かないか？　ここから歩いて5分かからないところにある」

男の人は罰が悪そうに辺りを見回しました。それにつられて確認してみると、たしかに人がちらりほらりと集まっているようでした。

まあ、パトカーのサイレンが聞こえたら、気になるのは人の性ですよ。

それにどっち道行くところのない私は、少しでも頼れる人を増やさないと野垂れ死んでしまいますから、断る理由がありません。

「そうですね。行きましょう」

「ああ。そこなら、多分着れる服くらいストックしてあるからな。だから素直に着替えてくれよ！」

「は、はあ。分かりました」

この人、私に露出癖があると勘違いしてませんか？　別に裸を見せたいわけじゃありません、ただ見られても羞恥心が沸かないだけという話です。積極的に見せたい人な

んで、いるはずないでしょう。

まあ、彼が渡してきた上着を罪悪感で躊躇した事が、その評価を助長したんだと思います。

それでも反応が初過ぎませんか？ 女性経験に乏しいのでしょうか？

◇

そうして来たのは大きな大きなビルでした。346プロという、テレビに出ている人たちが所属する事務所らしいです。

私は猫でしたので、街頭にあるテレビを時々覗くぐらいでしたから、そんなにテレビのことは詳しくありません。

でも、魔女は人気があるのは知っています。前に何千人もの男の人が集まって、画面の中の魔法少女という魔女に大声援をおくっていたのを見たことがあります。

おそらく、あんな感じでしょう。

朝早いせいなのか、敷地の中は人の姿はあまり多くありません。なのに彼は、異常なくらい周りを警戒しています。よく見ると、そんなに暑くもないのに、目に見えるほどの汗をかいていました。

見られたらまずいものでも、あるのでしょうか？

正面の大きな入り口はスルーして、わざわざ裏口に回って中に入りました。この人は、今から泥棒でもする気なのかってくらい念のいれようです。

本当に入っているのか、少し不安になりました。

どうにかビルに侵入した私たちは、エレベーターに乗って、30階で降りました。

その際も、彼は警戒を怠りませんでした。何だか、常に命を狙われている国の要人の気分でした。

そうして案内された部屋に入ると、彼は息を吐いてへなへたと座り込みました。

しかし、何かを思い立ったのか、すぐに立ち上がり、奥の部屋に入っていきました。

「ごそこそと物音が聞こえてくるところから、さつき言っていた服を探しているのでしよう。私的には、そんなに寒くないので、このままでも悪くないのですが。」

伸びをしながら、彼を待っていると、部屋のドアがノックされました。

「Pさん。千川ですが、今大丈夫ですか？」

Pさんというのは、私を助けてくれた男の人でしょうか？ そう言えば名前を聞くのを忘れていました。長い間、人の名前なんて聞いたことなかったのです。

しかし、それは後で聞けばいいでしょう。

今はドアの外の人をいれてあげましょう、Pさんはあちらにいますし。

「どうぞぞ」

「え？ 女声？」

女の声に驚いたのか、戸惑った声が聞こえてきた。

ドアが開かれるやいなや、入ってきた千川と名乗る緑の服を着た女の人は、私を見て身体を一步二歩引いた。

「だ、誰ですか!?! とうか、何でそんな薄着!?!」

説明したいところだけど、不審者扱いされている私が何を言おうと、変に捉えられてしまうかもしれない。

ここは第3者のPさんに、話を任せた方が懸命だろう。

「私から言うことはありません。事情は、Pさんに聞いてください」

「……分かりました」

奥の部屋を指さすと、その意味を理解した千川さんは、ツカツカと歩いていった。

雰囲気からは怒りと困惑が見てとれたが、私にはよく分からない。

「Pさん！ あの子はどこから連れてきたんですか！ あんなほぼ裸の格好で事務所に連れ込んで、何考えているんですか!?!」

「ち、ちひろさん!?! ちちちち、違います！ あの子は……その……俺が助けた黒猫で

す」

「ふざけてるんですか？」

ドスのきいた声に、Pさんの悲鳴はおろか、私も少し恐怖を抱いた。1000年生きてきた私をビビらせるなんて、千川さんは何者なんでしょう。

なりふり構っていられなくなったPさんは、必死に事情を説明します。

「本当なんですよ！ 信じられないでしょう、俺も信じられません！ ですが、真実なんです！ 今日出勤前に、轢かれそうになつた黒猫を庇つて俺は死んでしまったんです！ しかし、その黒猫は実は魔女だったようで、俺を生き返らせたんですよ！ だけど、その時使った魔法のせいで魔法が使えなくなつて、人間の姿に戻つてしまったようです……」

「だから、あんな姿だと？」

「はい。そうなんです」

Pさんは言い切りました。

この話は、ついさつきまで、話したPさん本人ですら信じていなかったのですが。

それなのに信じてくれとは、些か矛盾がある気がします。まあ、それだけ千川さんが怖いのでしょうね。気持ちには分かります。

「それで心優しい俺は、彼女に上着を貸してあげ！ それでは足りないので、服を着せる

ためにここまで必死に連れてきたというわけです！」

大方本当の話なのですが、変な修飾語のせいで胡散臭く聞こえます。自分は間違ったことはしていないと強調したいのでしょうか、それ逆効果ですよ。

この先の言葉は目に見えていたもので、私は静かに言い争いの聞こえる奥の部屋に向かいました。

「まったく信じられないんですけど……」

「Pさんの言っていることは本当ですよ」

「……!? け、心配を消して近づかないでください！」

跳ね上がるほど驚いた千川さんは、肩で息をしながら睨んできました。

そんなに驚かなくても……。警戒するのは分かりますが。

「はあ。そんなつもりはなかったのですが、驚かせてしまったようではありません」

「いいえ。私もつい取り乱してしまいました」

素直に頭を下げると、千川さんは気にするなと言ってくれました。

普通にいい人でした。

「今Pさんが言っていた通り、私は魔女です。いや、もう魔法は使えないので、魔女だったと言っているのが正確ですね」

「そう言われましても……」

千川さんは困った顔になってしまいました。

仕方ありませんね。この世界に魔法という概念は存在しないことになっていきます。お伽噺やファンタジーな世界でしか聞いたことがないものを、現実で信じろと言われて、素直に信じる人など普通いないでしょう。

ではここでどうするのが最善なのか。

簡単です。見たことないなら、見せてしまえホトトギス作戦です！

私は口の中から、小さな指輪を取り出しました。猫になっても、肌見離さず持っていたものです。

「今からこの指輪を使って、魔法を見せます。それなら信じてもらえるでしょうか？」

「魔法を……ですか？」

「はい。魔法をです」

千川さんは、怪訝な視線を向けてきます。ちなみにPさんも疑い顔です。信じると言っていたのは、嘘だったようです。

そんな視線を受けながら、私は左手の薬指に指輪をいれます。

「浮かべ」

そして呪文を唱えると、指輪の紅い宝石部分が眩い光を放ち始めた。

「……………え？ きゃ、きゃああ!!」

千川さんの身体が宙に浮きました。

私が今使ったのは浮遊魔法です。箒に使って空を飛ぶのが本来の使い方ですが、指輪だけの力だと人を一人浮かせるのが精一杯ですね。

私自身は魔法を使えませんが、この魔法道具である指輪を通せば弱い魔法は使えるようです。これは緊急時のために作っておいた物でしたが、思わぬ形で役にたちました。

あとPさん。気持ちは分かりますが、宙に浮いてる千川さんの下着を覗くのはやめた方がいいですよ。千川さんばつちり気がついてますから。

数十秒ほど浮いてもらったあと、千川さんを下ろしました。

そして千川さんは、Pさんに制裁を加えたあと、私の方を見ました。

「信じてもらえましたか？」

「は、はい。今のを見せられたら、信じるしかありませんよね」

「それは嬉しいです。ですが極力秘密でお願いします。魔法を使えるとなれば、色々面倒です。今は、命の恩人があらぬ嫌疑をかけられていたのを助けるために使いました」

「……これが恩人ですか？」

「はい。それがです」

下を向いて倒れている変態を指さす千川さんに、私は肯定します。

「……事情は把握しました。それで、あなたはこれからどうするんしょう？ 先程の話だと、行くところがないようですが」

「そうですね……。しばらくは働き口を探そうと思います。もう猫には戻れませんから、働かないと生きていけないんです」

「寝床などは？」

「ダンボールにでもくるまって、野宿する気です」

「バカなんですか!？」 もうイヴちゃんといい、あなたといい、何で女の子がそんな普通にダンボールにくるまるとか言えるんですか!？」

長く生きてると、羞恥心とかなくなっちゃうんですよ。なんて軽口が叩けるほど、私は命知らずではない。

そんなことを言ったら、そこで寝ている変態と同じ末路を辿ることになるでしょう。

「なら、うちの事務所でアイドルやればいいじゃないか」

「アイドルですか？」

Pさんは起き上がるとそんなことを言ってきました。

アイドルとは何でしょうか？ テレビに出る人でしょうか？

まあ、口を挟まず聞くだけ聞きましょう。

「ああ。アイドルをやれば仕事も決まって、寮にも入れるから寝床も確保できるぞ」

「やりましょう」

「そ、そんな簡単に決めていいんですか？」

「はい。断る理由がありませんから」

何をするかはまったく知りません。でも、私は心は広い方なので、大概のことは受け入れられます。そんなに大きな問題はないでしょう。

「よし。じゃあ、早速クール担当Pにお願いしに行こう」

「何言ってるんですか？ 本物の魔女なんてPさん以外に誰が担当するんですか？」

「ええ!? しかし、黒猫は明らかにクール枠ですから！ そこは専門家に任せようか」と

「これ以上担当アイドル増やしたくないからって、適当なこと言わないでください」

「はい。すいません。……また色物枠が増えるのか」

折れるの早！

よく状況が理解できませんが、私はPさんとお仕事をするようですね。事情を知っている人が近くにいると、私も心強いですし。

「はあ……まあ、しゃーないか。これからよろしくな黒猫」

「はい。お願います」

「午後から俺の担当してるメンバーがミーティングをやる。その時お前を紹介するか

ら、心の準備しておけよ」

「はい。……どんな人たちでしょうか？」

「え、それ聞いちゃう？」

何で言いよどむのでしょうか？ 不安になってしまいますよ。魔女の私にですら、伝えるのを躊躇するような無法者の集まりなんですか？

「えーと。……自称超能力者、キノコメタル、靈感少女、机がマイホーム、カワイイボク、唯一のつつこみ役だ」

「すいません。まともな人類はいないのでですか？」

「安心しろ。一応、みんな人類だから！」

何もかも諦めているのか投げやりに言ってきました。いらん指のグーサインが、ムカつきます。

どうということかと、千川さんを横目に見ると。

「Pさんの部署は、変わった子が多く集まるんですよ。みんな個性が強くて、一癖ありますが、いい子達ですよ」

「でもそれだけ手間がかかるんじゃないですか？」

あ、目をそらしやがりました。Pさんも明後日の方を見て口笛を吹いています。

どうやら、もう後戻りは出来ないようです。

……どうしましょう。始まってもしませんが、先行きがとても不安です。